

青丘文庫研究会 月報

No.283

2016年2月7日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (公財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 ①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)
 ②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円
 ※他に、青丘文庫に寄付する図書を購入費として2000円/年をお願いします。

<巻頭エッセイ>

臺灣一周「乗り鐵」紀行 坂本悠一



去る7月(2015年)15~20日、青丘チングの鈴木常勝「紙芝居好爺」を通訳に頼んで、臺灣一周旅行に行ってきた。目的は、①まず何よりも「臺灣国鐵」在来線の幹線区間を完乗すること、②次に巷間に言われる韓国との「反日度」の違いを実際に確認することであった。前者については、既にKorail 韓国鐵道全線と中国の旧満鐵哈爾濱~大連間を制覇しているので、旧植民地鐵道全線完乗という生涯目標へのステップである。後者については、最後に論及することとし、まず「乗り鐵」から行程を説明する。15日午前のAC(中華航空)機で、関空から桃園空港にフライト、時差1時間を考慮すると実質3時間弱である。空港から臺北市内にはBRT(新交通システム)が工事中なので、計程車(taxi)で臺鐵桃園車站(駅)に走り、その臺鐵本舖(旅行中心)で、臺鐵環島周遊票と火車時刻表を入手する。台湾ではすでに3年前にいわれる「臺灣高鐵」(新幹線)が東海岸で開通しているが、こんな代物には一切興味はないので、写真も撮らなかった。臺鐵在来線以外では阿里山森林鐵路と製糖鐵路(糖鐵)(いずれも762mmのNarrow Gauge)がお目当てである。初日は臺北市内で、①台湾の族群=民族構成をテーマとした國立臺灣博物館、②國立二・二八記念館を見学したが、後者については最後に触れる。そして臺北車站から今回の旅程では唯一となる「盲腸線」の基隆線區間車に乗って基隆で「臺灣初夜」を迎える。臺灣での夕食はほとんど安い夜市(포장마차)で済ませるが、オートバイの多さと아가씨의ショートパンツの美脚に驚かせられた。翌16日は、基隆車站から臺北松山車站を經由して合計5列車を乗り継いで、一気に南端の都市高雄に向かう。この区間は「日治時代」には部分的にNarrow Gaugeの臺東線があり、全島が狭軌(1067mm)として全通したのは約10年前のことである。途中花蓮車站で途中下車して、景勝地として有名な太魯閣溪谷を計程車で時間的に可能な限り奥地まで見学した。ここもかつては原住民太魯閣族を制圧する「太魯閣戦争」の戦場となった所であるが、その面影はまったくなくポーランド人の観光客が訪れるような国際観光名所となっていた。乗車した5列車中の圧巻は、臺東發榜寮行の「普快3638列車」で単線非電化区間をDLが牽引する旧型客車(窓の開閉が可能)で、エンジン音と重油の臭いで「乗り鐵」気分を満喫した。高雄車站には夜9時前の到着となり、夜市での遅い夕食を済ました。

3日目となる17日は早朝6時前に起床して、高雄車站16:15の自強108列車で一路阿里山林鐵の始発地である嘉義車站に向かい、同所には7時半過ぎに到着して林鐵の車票売り場に2番乗りで並ぶ。そうしなければ週末金曜日の全線指定列車に乗れない恐れがあるからだ。しかし残念なことに、数年前の大水害で一部区間の復旧工事のため全線直通列車は運休中で、途中をbusで連絡している。嘉義車站を定刻の09:00に発車した小型DL牽引の客車列車(화장실あり)はほぼ満席で、約2時間半か

けて中継地奮起湖車站に到着した。busに乗り継いで阿里山に到着したのは午後4時前、標高が高いので真夏にもかかわらず肌寒い。翌日に備えて早めに入浴し、鈴木好爺の副業でもある鍼灸治療を受けて、初めて飯店内でのやや豪華な中華夕食を撮った。翌18日は御来光観察のため早朝4時過ぎに起床して、満員の祝山車站行「日出列車」に乗って無事東空に出る太陽を眺めた。帰路は逆のコースを取って、途中奮起湖での有料観光ガイドも頼んで、嘉義經由彰化まで向った。彰化車站構内には臺鐵唯一の扇形車庫(turtn table)があるので、それを狙ったが既に見学時刻を過ぎ、やむなくコンクリートの高い屏超しに撮影を試みた。翌19日の最大の目的は溪湖糖鐵のSL牽引列車であり、彰化から最寄りの員林車站まで臺鐵に乗って、計程車で開園の午前9時には「溪湖糖廠糖業鐵道文化區園鐵」に到着した。日曜日とあって子ども連れ客も多く、早々に車票を買って各種鐵道グッズも入手して、まず10:20発のDL列車に一人で乗り込む。次いで待望の11:20発SL列車には二人して乗って、石炭の香りと警笛の音に鈴木好爺もご満悦、「乗り鐵」の神髓を伝授した。ちなみに2列車連続して乗ったのは私ただ一人であった。しかしその満足感に浸ってばかりはいかない。この日はもう一つの重要なtargetが控えているからだ。話を「日治時代」の1930年10月に戻して、原住民セデック族の酋長モール・ダナオ率いる抗日蜂起である「霧社事件」現場までなんとしても辿り着かねばならない。最寄り駅は臺中車站で、駅近で「背包客旅店(back pack)」に荷物を預けて、埋里經由の「南投客運bus」の揺られることおよそ約2時間、目指す霧社はまさに霧雨の最中、事件跡地のモール・ダナオ墓地を訪れる人影もなくひっそりと静まりかえっていた。busの時間待ちのため約2時間事件跡地を彷徨い歩き往事を偲んだ。この夜は臺中に戻りの夜市で韓国料理を味わった。最終日となる20日の目標は臺灣唯一の鐵道博物館である「苗栗鐵道文物展示館」であったが、入場無料のためか案内人もおらず、いくつかの車両が陳列されて説明文が置かれているだけであった。さてどうするかはまさに「鐵の本領」を発揮、当初の計画である在来線の「山線」乗車に加えて「海線」にも乗車できる時間的余裕があることを手元の時刻表で確認して、すぐさま行動に移す。経路は苗栗→竹南→彰化→桃園車站で、苗栗～竹南間は重複乗車となる。予定通り午後4時前には桃園空港に到着して、予定外の成果に凱歌の祝杯を挙げたのであった。

最後に第2の課題である臺灣の「親日度」について、臺北の二・二八記念館と霧社のモール・ダナオ墓地との対照的な佇まいがそれを如実に物語っている。遅ればせながら、ここで二・二八事件に触れねばならない。1947年2月27日、国民党軍の支配下にあった臺北市内の鬧市で煙草売りの아주머니が専売局職員によって暴力的な取締りを受ける。これに抗議する市民らが翌28日にかけて専売局を襲撃し、弾圧に乗り出した警察・軍隊と交戦し臺北市内を制圧する。これにたいし、当時まだ大陸にあった國民政府は新たに鎮圧部隊を増派し、臺灣全土で無差別殺戮いわゆる「白色テロ」を加えるという事態となり犠牲者の正確な人数は今以て確定できない。2年後の49年5月には臺灣全土に戒嚴令が施行され、87年7月まで継続した。國民政府が二・二八事件について初めて公式に謝罪したのは、95年2月の事件記念碑の除幕式における李登輝総統の声明であり、その後記念館の建設に至り国民的和解への道が拓かれることとなった。つまり臺灣住民とくに本省人の感情は、この長い國民政府の独裁体制にトラウマが生じ、かつての「日治時代」の記憶をも消失させるベクトルが働いたと考えられる。先に紹介したモール・ダナオの墓地の静寂を想起させる。以上を総括すれば、臺灣の民族構成がもつ重層的で複雑な構造、すなわち原住民(旧生蕃)+平埔族(旧塾番)+漢族(福建系+客家)=本省人 vs 外省人との間の葛藤が、植民地支配のトラウマをも上回ることになった。韓国との比較で言えば、ほぼ単一民族である韓国や共和国国民が、一致して「日帝時代」を糾弾するような民族的団結が長期間に涉って醸成されなかったということに尽きるのであるまいか。ちなみに臺灣では「日帝時代」という用語はなく、「日治時代」もしくは精々「日坻時代」と言うのが一般的である。(完)

第367回在日朝鮮人運動史研究会関西部会（2015年9月13日）

「金達寿「日本の中の朝鮮文化」論— —「朝鮮隠し」の言説空間に抗して」

廣瀬陽一

金達寿（新暦 1920-97）は、「日本と朝鮮・日本人と朝鮮人との関係を人間的なものにする」ことを生涯の課題とし、文学と古代史という二つの領域で大きな足跡を残した在日朝鮮人知識人である。にもかかわらず現在まで彼に関する研究は、日本でも韓国でも「在日朝鮮人文学」の領域、特に『玄海灘』など一部の小説に集中する一方、『日本の中の朝鮮文化』に代表される古代史研究が取りあげられることはなく、その当然の結果として両者の関連性が正面から問われたこともない。しかし両者の関連性をとらえる認識を欠いたまま彼の文学だけを論じて、彼の知的活動の全体像をとらえることはできない。そこで本発表では、彼の古代史研究の中に、文学活動から得た認識がどのように受け継がれているかについて論じることで、これまで軽視されてきた彼の古代史研究の意義をあらためて提示することを目指した。



まず、金達寿が一般的に、志賀直哉の文学の強い影響下で創作活動を行った自然主義文学者と見なされている点に触れ、この通説が伝記的事実としてさえ誤りであることを、1950年代を通じた志賀文学に対する彼の文学的闘争、特に短編「小僧の神様」に対する批判を取りあげて示した。それと平行して、彼が日本共産党内部の激しい権力闘争に巻きこまれた体験から、日本人と朝鮮人とは対立的な関係ではなく対立させられた関係にあると認識するようになった点についても指摘した。こうして発表者は、金達寿が50年代をつうじて、自然主義リアリズムを超える新たなリアリズムの確立を目指すようになり、さらにこの認識を深めるべく、60年代にかけてリアリズム研究会という文学運動体を主導したものの、最終的に失敗に終わったことを述べた。

その上で、議論の焦点を、70年前後から本格化する古代史研究へと移した。まず、金達寿の古代史研究の名著『日本の中の朝鮮文化』の書誌事項を整理した。次に、彼が「かつての古代、朝鮮とは日本にとって何であったか、同時にまた、日本とは朝鮮にとって何であったか」という疑問から、「帰化人」をめぐる日本古代史の言説空間の再検討を始め、古代の「帰化人」が近現代の日本人ではなく、(在日)朝鮮人と結びつけられてきたところに、朝鮮や朝鮮人に対する日本人一般の蔑視や偏見が生みだされているとともに、日本人が自己を腐蝕させ続けている根本的な問題があると考えたことを指摘した。そして金達寿がこの認識を文学活動の中ですでに獲得していたことを、国木田独歩の小説「武蔵野」と、彼が「武蔵野」の範疇に入ると思われる地域（現東京都狛江市）を取材した『日本の中の朝鮮文化』の一節を例に挙げて比較することによって明らかにした。

そして最後に、金達寿の古代史研究が、文学活動によってはついに創り出せなかった、学問領域や民族の障壁を超える大きな連帯を、日本社会と在日朝鮮人社会にまたがって実現させるものとなったことを評価し、ここに彼の古代史研究の現代的な意義があることを指摘した。また金達寿が『行基の時代』（1982年）を最後に、文学活動を辞めたことに対しても、創作意欲の衰えという消極的な理由よりもむしろ、自分が文学活動をつうじて目指してきた日本人と朝鮮人との関係が、古代史研究をつうじて現実化していったからという、積極的な理由があったのではないかという解釈を提示して、本発表の結論とした。



＜第9回強制動員真相究明全国研究集会＞

テーマ 「朝鮮人強制労働と世界遺産問題」

日時 2016年3月5日(土) 13:30～17:30

場所 愛知労働会館・東館

参加費 1000円(一般1000円 学生500円)

＜特別報告＞

①「朝鮮女子勤労挺身隊調査(追悼記念碑～99円、199円問題まで)を通じて『解決済み論』の誤りを糾す」

小出裕さん(名古屋三菱・女子勤労挺身隊訴訟を支援する会事務局総務)

②「地方儒生の日記から見た強制動員の実態」

金敏喆さん(韓国民族問題研究所責任研究員、太平洋戦争被害者補償推進協議会執行委員長)

＜各地域の報告＞

「三菱重工業・三菱鉱業と強制労働 ―長崎の産業革命遺産を中心に」/竹内康人さん(強制動員真相究明ネットワーク会員)/「戦時下の三井三池炭鉱と外国人労働者」廣瀬貞三さん(福岡大学)/「観光スポット、歪められた教育資料として宣伝される『明治日本の産業革命遺産』八幡製鉄所」兼崎暉さん(八幡製鉄所の元徴用工問題を追求する会)/「釜石と歴史の継承―世界遺産登録問題から考える」山本直好さん(日本製鉄元徴用工裁判を支援する会)

18:00～懇親会 会費 3000円

＜2日目フィールドワーク＞

集合日時: 3月6日(日) 午前8時50分

集合場所: JR名古屋駅新幹線口

参加費: 1000円(資料代・バス代)

コース: 勤労挺身隊寄宿舎跡→旧三菱重工名古屋航空機製作所道德工場跡

→勤労挺身隊犠牲者を含む東南海地震追悼記念碑:名南ふれあい病院

→三菱重工殉職碑→名古屋空襲跡を車窓から

解散: 正午ごろ 名古屋駅新幹線口

主催 強制動員真相究明ネットワーク <http://www.ksyc.jp/sinsou-net/>

●青丘文庫研究会のご案内●

■第301回朝鮮近現代史研究会

2016年2月14日(日) 午後3時～5時「朝鮮戦争下の日常―ある労働者の日記から」太田修

■在日朝鮮人運動史研究会関西部会 お休みです。

※会場 青丘文庫(神戸市立中央図書館内、TEL 078-371-3351、新館3階で身分を証明するものだして入館証を受け取り4階会議室にお越しください。)

【今後の研究会の予定】来月以降の予定。3月13日(日)在日(未定)近現代史(李景珉)。研究会は毎月第2日曜日です。報告希望者は、飛田または水野まで。

【月報の巻頭エッセイの予定】3月号以降は、全淑美、足立龍枝、渡辺さえ、池貞姫、張允植、横山篤夫、松田利彦、西村寿美子、玄善允、川口祥子。よろしく願います。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】■月報12月号と1月号は休刊しメールニュースのみ発行しました。■ちょうど旧正月だからいいでしょう。あけましておめでとうございます。本年もよろしく願います。(飛田)